

ジョナサン・ブラウン著

ブハーリーとムスリムの正典化：  
スンナ派ハディース正典の形成と機能

森 山 央 朗

本書は、題名が示すとおり、ブハーリー al-Bukhārī（西暦870年没）とムスリム Muslim b. al-Ḥajjāj（875年没）が編纂した2編の『正伝集 *al-Ṣaḥīḥ*』の「正典化（canonization）」<sup>(1)</sup>を論じたものである。『正伝集』とは、編纂者が正真 (ṣaḥīḥ) と認めたハディース (ḥadīth) を集めた書物であり、ハディースとは、預言者ムハンマド Muḥammad（632年没）の言行を語る伝承である。イスラーム教徒 (muslim) は、このハディースを、信仰・思想・行動の価値基準として、神の啓示に次いで重視してきた。中でも、スンナ派イスラーム教徒にとって、ブハーリーとムスリムの『正伝集』は、最も信頼の置けるハディースを集めたものとして、『コーラン *al-Qur'ān*』に次ぐ権威を持つ。ここまでは常識であるが、ハディースの権威の形成過程や、各時代・地域のイスラーム教徒諸社会において、ハディースとその権威がどのように受容され活用されてきたかについては、不明の部分が多い。

神が預言者ムハンマドを通して下した啓示を集めた『コーラン』の権威は、イスラーム教徒にとって自明かつ絶対である。テキストも7世紀中葉に確定・統一されたと信じられ、異本の存在は原則的に認められてこなかった。これに対して、預言者ムハンマドの言行を伝えるハディースの権威をめぐることは、イスラーム教徒の間で常に議論が続けられてきた。また、確定・統一されたテキストが存在するわけではなく、無数の言説が預言者に関するものとして伝えられ、8世紀以来、数多くのハディース集が編纂されてきた。

それでは、無数のハディースが流布し、多数のハディース集が編纂された中で、なぜ、ブハーリーとムスリムが編纂した2編の『正伝集』が、信仰・思想・行動の価値基準として『コーラン』に次ぐ高い権威を与えられるようになったのだろうか。これら2編の『正伝集』の権威は、どのような歴史的過程を踏んで形成され、その背景にはどのような政治的・社会的・文化的状況とその変遷があったのだろうか。本書は、ブハーリーとムスリムの『正伝集』がスンナ派にとって権威的な価値基準として確立されていく過程を「正

典化」と捉える。そして、11世紀前後を中心に、7世紀後半から20世紀までを視野に入れて、その「正典化」の歴史的展開を分析し背景を論じる。

著者が指摘しているとおり、両『正伝集』(Ṣaḥīḥayn) がスンナ派にとって高い権威を持つことは周知の事実であるものの、権威化の過程と原因・背景はほとんど明らかにされていない<sup>(2)</sup>。従って、本書は、ブハーリーとムスリムに付された権威の歴史性に正面から取り組んだ、最初の本格的専論と位置づけられる。さらに著者は、「正典化」という現象を、共同体のアイデンティティ、権威の概念、テキストの性格と利用、これら3者の相関関係として分析することを表明し、この分析枠組によって、両『正伝集』の「正典化」を明らかにすることが、それを行った共同体、すなわち、スンナ派の成り立ちや性格を探求することにもつながると述べている<sup>(3)</sup>。

より広くハディースをめぐる研究全体から見ても、本書の問題設定は大きな可能性を持つ。歴史研究におけるハディースに関する議論においては、それが預言者時代の史実を伝えるものか、あるいは、後代の捏造かという問題が取り沙汰されてきた。しかし、ハディースが語る内容の真偽に対する見解は、個々人の信仰や信条に根ざす部分が大きいため、真偽に関する論争に建設的な成果はあまり期待できない。むしろ、ハディースが語られた時代・地域に持っていた権威のあり方や、ある事象を預言者の言行として語ることの意味、ハディースをめぐる知識体系であるハディース学の形成と展開などについて論じる方が、イスラームという宗教やイスラーム教徒社会の歴史を理解する上では有益である<sup>(4)</sup>。こうした問題意識に基づいてハディース／ハディース学の歴史を論じる際に、ブハーリーとムスリムの権威化は避けては通れない問題であり、この問題に切り込もうという著者の姿勢は高く評価されるべきである。

以上のように、本書の問題設定は非常に意義深いものである。では、設定した問題に対してどのような方法を採用し、どのように分析を進め、どのような結論を出したのだろうか。以下、本書の内容を概観する。本書は、2部10章で構成される。第1部第1章は、「導入 (Introduction)」である。ここでは、上記の問題設定と意義、分析枠組が述べられるほか、ブハーリーとムスリムに関する西洋と「現地」の先行研究を概観し<sup>(5)</sup>、史料と史料分析の方法が紹介される。用いる史料の類型は、人名録、ハディース学理論書、法学書である。分析の方法は、これらの史料におけるブハーリーとムスリムの描かれ方、両『正伝集』からの引用のあり方などを検討し、両『正伝集』が、いつ、どこで、どのような人々に、どのように評価され、どのように受容され、どのように利用されて、どのように「正典」として練り上げられていったのかを論じていくというものである。

続く第2章は、「正典と正典化に関する研究 (The Study of Canons and Canonization)」と題されている。この章は、西洋思想研究の成果を参照しつつ、ギリシア哲学やキリスト教学から抽出された「正典」という概念が、ハディースの権威を分析するために有効な概念装置であることを検証する。

第1章、第2章で論じられた問題設定と分析枠組・方法、概念装置を前提として、第3章から実証部分に入る。第3章「ブハーリーとムスリムの起源 (The Genesis of al-Bukhārī and Muslim)」では、7世紀後半から13世紀までのハディース学の発展を概観し、その中にブハーリーとムスリムを位置づける。この第3章を通して主張されることは、10世紀中葉までは、ブハーリーとムスリム、および彼らが編纂した『正伝集』に特別に高い権威が付与されることはなかったということである。

第4章「『激しく正典化が進行する時代』 (A ‘Period of Intense Canonical Process’)」は、両『正伝集』を研究・利用する人々が出現し、ブハーリーとムスリムに権威的なイメージが付与されていく過程を分析する。著者は、ヒジュラ暦3世紀(西暦9世紀)後半から5世紀(11世紀)前半を「長い〔ヒジュラ暦〕4世紀 (long fourth century)」と呼び、この時代に、両『正伝集』を「正典化」するための基礎が築かれたとする。この基礎構築を中心的に担ったのは、マシュリク地域で活動したシャーフィイー派ハディース学者たちであった。彼らは、師弟関係と両『正伝集』の学習・研究を通して相互に結びつき、「両『正伝集』ネットワーク (Ṣaḥīḥayn Network)」を作り上げていった。このネットワークの中で、両『正伝集』の関連文献を作成し、ブハーリーとムスリムが用いた方法を、自分たちのハディース集編纂の「ひな形 (template)」として利用した。彼らは、両『正伝集』を「正典」としてその権威に全面的に依拠したわけではなく、「生きたイスナード (living isnād)」<sup>(6)</sup>に基づいたハディース収集を続けていたが、両『正伝集』のテキストを確定し、ブハーリーとムスリムの方法を定式化したことによって、「正典化」の条件を整えていったのである。しかし、この段階では、両『正伝集』は、一部のハディース学者の工具書であり、学問的興味の対象でしかなかった。

両『正伝集』の権威がスンナ派全体に拡大し、「正典」となるきっかけを作ったのは、ニーシャープールのハディース学者、ハーキム・アンナイサーブリー al-Hākim al-Naysābūrī (1014年没)であった。第5章「正典と共同体 (Canon and Community)」は、両『正伝集』が「正典」としての権威を獲得し、その権威がハディース学の枠を越えて広がっていく過程を、ハーキムの活動とその影響に焦点を当てて描く。ハーキムが行ったことは、ブハーリーとムスリムが『正伝集』編纂に用いた方法を精査し、それをハディースの正真性の基準に変換したことである。この正真性の基準が、「両『正伝集』ネッ

トワーク」に参加していたハディース学者のみならず、彼らに敵対的なムウタズィラ派やハナフィー派などにも、論争上の判定基準として受容されたことにより、両『正伝集』はスンナ派共通の「正典」として確立されていったのである。

以上の第5章までが、本書の第1部である。この第1部では、全体の問題設定と、両『正伝集』の「正典化」の歴史的過程が論じられた。これに対して、第6章から第10章までの5章で構成される第2部は、「正典化」された両『正伝集』のスンナ派共同体における受容と利用を論じる。

第6章「正典と共同体の必要 (The Canon and the Needs of the Community)」は、両『正伝集』の「正典化」が、スンナ派共同体内部の3つの必要に支えられていたことを明らかにする。(1) 最初に指摘される必要は、共通の正真性判定基準に対する必要である。11世紀以降、学派の境界が明確になるにつれて、スンナ派共通の基準としての両『正伝集』に対する必要が高まっていたと述べる。(2) 第2の必要は、ハディース学以外を専門とするウラマーが、安心して参照できる権威的なハディース集に対する必要である。(3) 第3の必要は、模範に対する必要である。ブハーリーとムスリムは、あるべきハディース学のあり方を示すと主張され、11世紀から13世紀にかけて、ハディース学の枠組みの整備に貢献した。両『正伝集』の「正典」としての権威は、見解や専門を異にする学者・学派間の相関関係に起因する必要に支えられていたが故に、議論などの相関関係が成立するところでのみ発動し、無批判に受容されることはなかったのである。

第7章「善意の原則と正典文化の創出 (The Principle of Charity and the Creation of Canonical Culture)」は、本質的には不安定な両『正伝集』の「正典」としての権威が、どのように維持されてきたかを分析する。ここで使用される概念装置、「善意の原理 (principle of charity)」とは、テキストの含意と現実が調和するように、テキストを好意的に解釈しようとする原理である。そして、「正典文化 (canonical culture)」とは、「正典」に対する「善意 (charity)」の解釈によって作り出されるある種の世界観 (worldview) を指す。この2つの概念装置を使って主に分析するのは、ハティーブ・アルバグダーディー al-Khaṭīb al-Baghdādī (1071年没) の『バグダード史 *Ta'rikh Baghdād*』に収録された、ブハーリーとムスリムの伝記記事である<sup>(7)</sup>。ハティーブは、ブハーリーとムスリムに関する否定的な評価やハディース学上の欠点を削除し、完璧なハディース学の巨頭というイメージを前面に押し出した。ハティーブが編集したこのイメージは、以後繰り返し再生産され、両『正伝集』の「正典」性の維持に貢献してきたという。

本書の中心的な課題、すなわち、両『正伝集』の「正典化」の過程と背景

の分析は、第7章で終わりである。第8章「正典と批判 (The Canon and Criticism)」では、13世紀に両『正伝集』の「正典化」が完了して以降、20世紀に至るまで、「正典化」した両『正伝集』にどのような批判が加えられてきたかを概観する。第9章「正典と提喩 (Canon and Synecdoche)」は、両『正伝集』という2編の書物が、11世紀以来、様々な儀礼において一種の祭具として用いられ、ウラマーの書く文章の中で、預言者の慣行などを表す提喩として使われていることを紹介する。

第10章は「結論 (Conclusion)」である。ここでは、これまでの分析を踏まえて、以下の6点に対して、著者の見解を明らかにする。(1) なぜ両『正伝集』だけが「正典化」されたのかという問題に対しては、両『正伝集』だけがスンナ派コミュニティの信頼と合意を得ることができたからだという。(2) 「正典化」を推進した要素は、スンナ派のアイデンティティの発達であり、(3) 11世紀に「正典化」が進んだ原因は、スンナ派共通の価値基準が必要とされたことにある。(4) 「正典」は対立や論争から出現するのかという問いに対しては、両『正伝集』の場合、むしろ共同体の合意によって成立したと反証し、(5) シーア派對策として両『正伝集』が「正典化」されたという意見に対しては、これを否定している。両『正伝集』の権威は、それを認めないシーア派に対してよりも、共通の価値基準として受容したスンナ派内部の論争においてより有効に機能するものだからである。(6) 地域限定性の問題に対しては、両『正伝集』を「正典」とすることは、あらゆる地域のスンナ派に共通することを確認する。そして最後に、「正典」としての両『正伝集』は、共同体の必要や懸案事項に応じて作り上げられてきたと述べ、本書全体の議論を総括している<sup>(8)</sup>。

このように、本書は、11世紀前後の「正典化」に分析の焦点を据えつつ、7世紀後半から20世紀に至る長い期間に目を配って両『正伝集』の歴史の変遷を描き出し、その背景を論じている。本書の問題設定が大きな意義を持つことは、既に述べた。本書の議論と見解に、どのような意義と問題点があるのかを整理して、本稿を終えることとしたい。

本書の議論が持つ意義としては、何より、両『正伝集』が特別な権威を持つようになる過程を明らかにしたことである。第4章から第7章にかけての分析は実証性が高く、ハディースをめぐる具体的な学問的活動の中で、どのように両『正伝集』の権威が形成され定着していったのかを描き出したことは、大きな成果と言える。また、ハーキムやハティーブといった著名なハディース学者が、両『正伝集』の権威の形成過程に果たした役割を措定したことも、スンナ派ハディース学の展開を解明する上で重要な貢献となる。

一方で、本書の問題点としては、史料の解釈がいささかナイーブに思える

ことがあげられる<sup>(9)</sup>。ハディース学者の間を流通したテキストと言説から、両『正伝集』の評価やイメージの変遷を追うという作業を行うためには、分析対象とした史料の性格や記述の偏向を把握しなければならないのは当然である。著者も史料批判に無頓着ではないが、より精密に史料の性格と偏向を論じておけば、より説得的な解釈を提示し、分析をより深めることができたのではないかと惜しまれる。しかし、著者の議論を覆すような「誤読」が見られるわけではなく、これは本質的な問題ではない。

本書が抱える本質的な問題は、次の2点である。(1) 最初の問題は、Canon という分析概念を用いることの妥当性である。この問題は第2章で論じられているが、一般的に知られている両『正伝集』の性格や機能から、Canon の含意に合致する要素を列挙しているだけで、この概念を用いる必然性や積極的な意義は看取されない。両『正伝集』の地位や評価の上昇は、「権威化」などのより一般的な概念で充分説明できたのではないだろうか。むしろ、Canon という概念を使用しているために、両『正伝集』の分析から、Canon とは何かという問題へ外れる傾向があり、著者の議論を徒に難解にしている印象が強い。この印象が、評者に西洋思想や聖書学に関する知識が不足していることに起因する可能性は否定できず、それらの分野に精通した読者にとっては理解の助けになるとも考えられる<sup>(10)</sup>。それでもなお、文化的背景が異なる事例から抽出された概念を、主要な概念装置として分析に入る前に設定することには慎重になるべきである。Canon という概念を持ち出すのであれば、実証分析に基づいた考察によって両『正伝集』の権威のあり方や形成過程について一定の結論を出した後で、比較による補助線として援用した方が生産的であったように思われる。

(2) 2番目の問題は、なぜブハーリーとムスリムの『正伝集』だけが、類書を圧して特別な権威を得たのかという問いに対して、回答できていないことである。この問いに関しては、3つの節<sup>(11)</sup>で回答を試みているものの、結論部分に見られるように、彼ら2人の『正伝集』だけが共同体の合意と信頼を得たからという結論に帰着している。これは、トートロジーである。あるテキストが共同体の権威的な価値基準になるということは、そのテキストを受容し利用する共同体が、テキストの内容と権威に合意と信頼を与えるということに他ならない。従って、なぜブハーリーとムスリムかという、本書の最初にあげられた問題に回答するためには、両『正伝集』が価値基準となる過程を描くだけでなく、その過程の中で、スンナ派共同体が信頼と合意を与える対象として両『正伝集』を選択した原因を明確にしなければならなかった。本書の議論は、この問題に踏み込まないまま、最初に設定した問いに、結論で戻ってしまっているのである。

とはいえ、なぜブハーリーとムスリムが権威的な価値基準として選択されたのかという問題は、スンナ派ハディース学だけでなく、スンナ派全体、あるいはハディースそのものの成り立ちや性格に関わる大きな問題であり、1編の単著に結論を期待することは穏当ではない。本書が描き出した両『正伝集』が権威化していく歴史的過程は、ブハーリーとムスリムが権威化した原因を究明するための基礎となるのはもちろん、ハディースがイスラーム教徒の社会で果たした機能や、その権威の受容と利用のあり方を解明する上でも、重要な知見となる。本書は、ハディースの歴史的研究にとって、有益な足がかりを提供するものと言えるだろう。

## 註

- (1) 本書は、Canon/kanón という言葉を、正統的・権威的な書物（『聖書』における「外典」に対する「正典」、行動・思想などの規範・価値基準、唱えられるべき「奉獻文」など、様々な含意を込めて使っている。従って、単一の訳語に統合することは難しいが、限られた紙幅で訳語を検討することは効率的ではなく、規範として参照される正統的で権威的なテキストという意味で理解することが最も包括的であるので、本稿では「正典」の訳語で統一する。Canonization は、「正典化」とする。詳細は、本書第2章を参照。
- (2) 本書 p. 5.
- (3) 本書 pp. 4-5, 15.
- (4) ハディースをめぐる研究状況については、小杉泰「ハディース」小杉泰、林佳世子、東長靖（編）『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、2008年、pp. 71-77を参照。
- (5) 西洋の先行研究としては、ゴールドツィーハー Ignaz Goldziher 以下、ハディースや『正伝集』の重要性に言及した研究があげられている。「現地」の研究としては、アラビア語とペルシア語によって1990年代以降に発表された研究があげられている。
- (6) イスナードとは、ハディースの伝承経路部分。預言者の言動を直接見聞きした人から、その情報を伝達してきた人々の名前が表示される。「生きたイスナード」とは、ハディースを聴取・引用・記録する度に、預言者からそれぞれの聴取者・引用者・記録者に至るイスナードを記録・表示すること。13世紀以降、両『正伝集』をはじめ、一定のハディース集の権威が周知されるようになると、それらの書物を典拠として表示し、ハディースを利用する度に、利用者から預言者にまで遡るイスナードをいちいち表示することはなくなっていく。

- (7) al-Khaṭīb al-Baghḍādī, *Ta'rikh Baghdād*, ed. Muṣṭafā 'Abd al-Qādir 'Aṭā, 14 vols.+index, Dār al-Kutub al-'Ilmiya, Bayrūt, 1998, Vol. 2, pp. 5-33, Vol. 13, pp. 101-104.
- (8) 結論の後に付録 (Appendix) として、「両『正伝集』ネットワーク」チャート (pp. 102-103) の参照表と、「両『正伝集』の帰属問題 (The Question of the Attribution of the *Ṣaḥīḥayn*)」という小論が付されている。
- (9) 例えば、86頁から87頁にかけて、10世紀以降の文献に記載された逸話を基に、ブハーリーとムスリムの同時代 (9世紀) における評価を論じている。逸話の一つは、ある人物が、ブハーリーほど優れたハディース学者を見たことがないと言ったというものである。別の逸話では、ブハーリーとムスリム以外の人物が、「これほど優れたハディース学者を見たことがない」と言われていたという。しかし、「某ほど優れた人物を知らない」という語りは、常套句であり、その逸話が書かれた当時の「某」に対する高い評価の証左とはなるが、逸話が語っている時代の評価を示していると解釈するのは危険である。また、常套句であるので、優れていると言われている人物の評価を漠然と語るものであり、具体的な同時代人との比較の上に語られているものでもない。
- (10) 欧米の研究文献が、両『正伝集』などに収録された権威的なハディースに Canon の語を付すことはしばしば見られる。最近の例としては、Gautier H. A. Juynboll, *Encyclopedia of Canonical Ḥadīth*, Brill, Leiden/Boston, 2007.
- (11) 第4章第9節 (pp. 149-151)、第5章第15節 (pp. 205-206)、第10章第1節 (pp. 360-362)。このうち結論部分の第10章第1節で述べられた見解は、上記の通り。第4章第9節では、ブハーリーとムスリムだけが正真なハディースの収集に専心したと認められたからと述べる。しかし、「正伝」をうたったハディース集が他にも存在することは、第3章 (pp. 54-56) で指摘されている。両『正伝集』の権威化を進めたハディース学者も、他のハディース集の権威を否定したわけではない。何より、正真なハディースの収集に専心した完璧なハディース学者というブハーリーとムスリムの評価が、両『正伝集』が価値基準となった後で確立されたことは、第7章で論証されている。従って、第4章第9節の見解は、両『正伝集』だけに特別な権威が付された原因を、完全には説明していない。第5章第15節では、ハーキムが「正典化」の触媒となったことを指摘する。これは、両『正伝集』が権威化した過程の説明であって、なぜハーキムが両『正伝集』の権威を高めることを目指したのかについては、答えていない。



Jonathan Brown, *The Canonization of al-Bukhārī and Muslim: the Formation and Function of the Sunnī Ḥadīth Canon*, Brill, Leiden/Boston, 2007, (Islam History and Civilization: Studies and Texts, Vol. 69), xxii+431p.

本稿は、平成19・20年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。

東  
洋  
学  
報

第  
九  
十  
卷  
  
一  
六  
二